

CS1-2〔I〕

マイクロポーラー弾性体の2次元動弾性問題の境界要素解析

福井大学大学院 学生員 奥井裕三  
福井大学工学部 正員 福井卓雄

1. はじめに

内部構造を持つ物体中を弾性波が伝播する場合には、微小散乱の繰り返しによる分散のために、古典弾性体中の波とは異なる挙動をする。本論文では、内部構造をもつ物体として、マイクロポーラー弾性体を取りあげ、2次元動弾性問題について考察する。まず、基本特異解を求め、その特性をみる。また、このような物体中の散乱問題を扱うために、境界要素法を構成する。

2. マイクロポーラー弾性体の2次元動弾性問題

Eringen<sup>(1)</sup>によると、線形マイクロポーラー弾性論における基礎式は、次のようになる。 $\lambda, \mu$  を Lamé 定数、 $\rho$  を質量密度、 $\kappa, \alpha, \beta, \gamma$  をマイクロポーラー弾性定数、 $j$  をマイクロ慣性モーメントとして、 $u_i, \phi_i$  をそれぞれ、変位、マイクロローテーションとし、 $f_i, l_i$  をそれぞれ、物体力、物体偶力とすると、

$$\begin{aligned} \rho(c_2^2 + c_3^2)u_{i,jj} + \rho(c_1^2 - c_2^2)u_{j,ji} + \rho c_3^2 \varepsilon_{ijk} \phi_{k,j} + f_i &= \rho \ddot{u}_i \\ \rho c_3^2 \varepsilon_{ijk} u_{k,j} + \rho j c_4^2 \phi_{i,jj} + \rho j c_5^2 \phi_{j,ji} - 2\rho c_3^2 \phi_i + l_i &= \rho j \ddot{\phi}_i \end{aligned} \quad (1)$$

ここで、 $c_1^2 = (\lambda + 2\mu)/\rho$ ,  $c_2^2 = \mu/\rho$ ,  $c_3^2 = \kappa/\rho$ ,  $c_4^2 = \gamma/\rho j$ ,  $c_5^2 = (\alpha + \beta)/\rho j$ ,  $\omega_0^2 = c_3^2/j = \kappa/\rho j$  とおいた。また、添え字は、1, 2, 3 をとるものとする。2次元問題(面内問題, 面外問題)においては、変位  $u_i$ 、マイクロローテーション  $\phi_i$  を  $u_i = u_i(x_1, x_2)$ ,  $\phi_i = \phi_i(x_1, x_2)$  と仮定すれば、基礎式(1)は、面内問題について、

$$\begin{bmatrix} \rho[(c_2^2 + c_3^2)\nabla^2 \delta_{\alpha\beta} + (c_1^2 - c_2^2)\nabla_\alpha \nabla_\beta] & \rho c_3^2 \varepsilon_{3\alpha\beta} \nabla_\beta \\ \rho j \omega_0^2 \varepsilon_{3\alpha\beta} \nabla_\alpha & \rho j (c_4^2 \nabla^2 - 2\omega_0^2) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_\beta \\ \phi_3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} f_\alpha \\ l_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \rho \delta_{\alpha\beta} & 0 \\ 0 & \rho j \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \ddot{u}_\alpha \\ \ddot{\phi}_3 \end{bmatrix} \quad (2)$$

面外問題について、

$$\begin{bmatrix} \rho(c_2^2 + c_3^2)\nabla^2 & \rho c_3^2 \varepsilon_{3\alpha\beta} \nabla_\alpha \\ \rho j \omega_0^2 \varepsilon_{3\alpha\beta} \nabla_\beta & \rho j (c_4^2 \nabla^2 - 2\omega_0^2) \delta_{\alpha\beta} + c_5^2 \nabla_\alpha \nabla_\beta \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_3 \\ \phi_\beta \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} f_3 \\ l_\alpha \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \rho & 0 \\ 0 & \rho j \delta_{\alpha\beta} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \ddot{u}_3 \\ \ddot{\phi}_\alpha \end{bmatrix} \quad (3)$$

となる。ここで、ギリシア文字の添え字は、1, 2 をとり、ラテン文字の添え字については、これまでどおりとする。以後は、面内問題に限って記述するが、面外問題についても同様に扱うことができる。

3. 基本特異解

基本特異解テンソル  $\Gamma_{ij}$  を次式のように定義する。

$$\mathbf{L}_{ij} \Gamma_{jk}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) = -\delta_{ik} \delta(\mathbf{x} - \mathbf{y}) \quad (4)$$

ここで、 $\mathbf{L}_{ij}$  は式(3)に対する微分作用素、 $\delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})$  は、Dirac のデルタ関数である。基本特異解は、

$$\begin{aligned} \Gamma_{\alpha\beta}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) &= \frac{k_{34}}{\rho a} \left[ \left( d_3 F(k_3 r) - d_4 F(k_4 r) \right) \delta_{\alpha\beta} \right. \\ &\quad \left. - \frac{1}{b} \frac{\partial^2}{\partial x_\alpha \partial x_\beta} \left[ k_{13} q_3 \left( F(k_1 r) - F(k_3 r) \right) - k_{14} q_4 \left( F(k_1 r) - F(k_4 r) \right) \right] \right] \\ \Gamma_{\alpha 3}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) &= i \frac{k_{34} j \omega_0^4 \varepsilon_{3\alpha\beta}}{\rho a} \frac{\partial}{\partial x_\beta} \left[ F(k_3 r) - F(k_4 r) \right], & \Gamma_{3\alpha}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) &= -\Gamma_{\alpha 3}(\mathbf{x}; \mathbf{y}), \\ \Gamma_{33}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) &= \frac{k_{34}}{\rho j a} \left[ h_3 F(k_3 r) - h_4 F(k_4 r) \right] \end{aligned} \quad (5)$$

ここで,

$$k_{ij} = \frac{1}{k_i^2 - k_j^2}, \quad r = |\mathbf{x} - \mathbf{y}|, \quad a = c_4^2(c_2^2 + c_3^2), \quad b = c_1^2 + c_3^2$$

$$d_i = c_4^2 k_i^2 + 2\omega_0^2 - \omega^2, \quad h_i = (c_2^2 + c_3^2)k_i^2 - \omega^2, \quad g_i = d_i(c_1^2 - c_2^2) + j\omega_0^4$$

とした。また,

$$F(k_i r) = -\frac{i}{4} H_0^{(1)}(k_i r) \quad (k_i^2 > 0), \quad \frac{1}{2\pi} K_0(k_i r) \quad (k_i^2 < 0)$$

である。ここで、 $H_0^{(1)}$  は第1種0次のHankel関数、 $K_0$  は、第2種0次の変形Bessel関数である。 $k_i^2 > 0$  のときは、 $F$  は、複素関数となり、 $k_i^2 < 0$  のときは、実数関数となる。また、変位の基本特異解に対応する応力および、偶応力を  $\Sigma_{ijk}(\mathbf{x}; \mathbf{y})$  とすると、 $\eta = \alpha/\beta$  として、

$$\tau_{\alpha\beta}^{(k)} = \Sigma_{\alpha\beta k}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) = \rho(c_1^2 - 2c_2^2)\Gamma_{\lambda k, \lambda\delta, \alpha\beta}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) + \rho(c_2^2 + c_3^2)\Gamma_{\beta k, \alpha}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) + \rho c_2^2 \Gamma_{\alpha k, \beta}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) - \rho j\omega_0^2 \epsilon_{3\alpha\beta} \Gamma_{3k}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) \quad (6)$$

$$\mu_{\alpha 3}^{(k)} = \Sigma_{\alpha 3 k}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) = \frac{\rho j c_5^2}{1 + \eta} \Gamma_{3k, \alpha}(\mathbf{x}; \mathbf{y})$$

となる。ただし、 $k=1, 2$  は、物体力、 $k=3$  は、物体偶力が作用する場合に対応する。図1、2に基本特異解  $\Gamma_{11}$  の例を示す。これから、伝播に方向性があることがわかる。 $\rho=1.0$ 、 $c_1^2=4.0$ 、 $c_2^2=2.25$ 、 $c_3^2=1.0$ 、 $c_4^2=3.5$ 、 $c_5^2=1.0$  として、 $j=1.0$  のときを図1に、 $j=0.01$  のときを図2に示した。

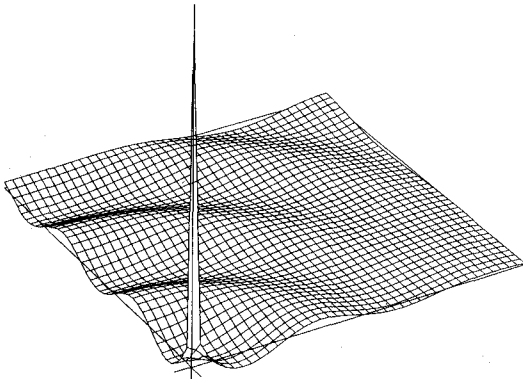


図1  $j=1.0$  の場合

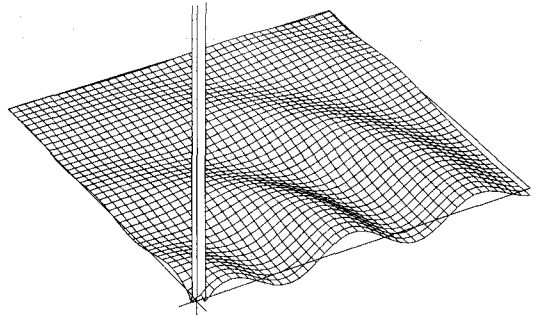


図2  $j=0.01$  の場合

#### 4. 境界積分方程式

無限のマイクロポーラー弾性体中の空洞による散乱問題に対する解の積分表現は、 $u_i^l$  を入射波、 $B$  を領域、 $\partial B$  を境界、 $\bar{B}$  を空洞とすると、

$$C(\mathbf{x}) u_i(\mathbf{x}) = u_i^l(\mathbf{x}) + \int_{\partial B} \Gamma_{ij}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) t_j(\mathbf{y}) dS(\mathbf{y}) - \int_{\partial B} P_{ij}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) u_j(\mathbf{y}) dS(\mathbf{y}) \quad (7)$$

となる。ここで、 $\Gamma_{ij}(\mathbf{x}; \mathbf{y})$  は、式(5)で与えられる基本特異解であり、 $P_{ij}(\mathbf{x}; \mathbf{y}) = n_\alpha(\mathbf{y}) \Sigma_{\alpha ji}(\mathbf{y}; \mathbf{x})$  である。また、 $C(\mathbf{x})$  は、境界  $\partial B$  が滑らかであるとすると、 $\mathbf{x} \in B$  のとき1、 $\mathbf{x} \in \partial B$  のとき1/2、 $\mathbf{x} \in \bar{B}$  のとき0である<sup>(2)</sup>。点  $\mathbf{x}$  が境界上にあるとき、(7)は境界積分方程式となる。なお、変位  $u_i$  の添え字が3のときは、 $u_3$  でなく  $\phi_3$  をとるものとする。 $t_i$  についても同様に定義する。

解析の詳細については当日発表する。

#### 参考文献

- (1) Eringen, A.C, Theory of Micropolar Elasticity., in *Fracture*, ed. H.Liebowitz, Vol.2, ch.7, Academic Press, (1968)
- (2) 境界要素法研究会編, 境界要素法の応用, 第2章 弾性波動問題への応用, コロナ社 (1987)